

令和4年度 小平市立小平第十三小学校 学校評価報告書

学校教育目標		21世紀をたくましく生きる子どもたちを育てることを目指し、以下の教育目標を設定する。 ◎自ら考え行動する子ども(重点目標)・仲良く助け合う子ども・明るく元気な子ども						
目指す学校像(ビジョン)								
【目指す学校像】		子どもたちのみならず、教職員、保護者、地域社会が、「自ら学び、他と共に」を共有し、自己の向上を求め続ける学校						
【目指す児童・生徒像】		自ら学び、他と共に生きる子ども						
【目指す教員像】		自ら考え行動し、常に研鑽を積み、自己の向上を求め続ける教職員						
前年度までの学校経営上の成果と課題								
【成果】		教職員が丸となって「健全育成」と「児童理解」に取り組んできたことにより、児童にとって居心地のよい学級・学校を実現できた。						
【課題】		基礎的・基本的な学力の定着及び、知識や技能を活用し、学習者用端末を有効に活用しながら工夫して課題解決を行うことで、基礎的な学力向上を更にすすめることが必要である。						
	具体的方策	第1回評価 取組評価 成果評価	成果・課題・対策	第2回評価 取組評価 成果評価	学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策		
学力向上	①ホワイトボードの活用 ②ペアやグループでの意見交流 ③タブレット端末を中心としたICT教育機器の拡充と活用 ④授業アンケートの実施 ①「はい、立つ、です」の徹底 ②学習補助員の活用と個別指導 ③東京ベースィッドリルの活用 ④習熟度別によるきめ細かい算数科の指導	3	3	年度当初に、授業規律やホワイトボードの活用について周知したことで、浸透している。「こだらこれだけは」を各学級で確実に実施している。 資料の提示、児童の考えの共有など、様々な場面で全学年においてタブレット端末を活用できている。家庭への持ち帰りも順次進めている。 毎週金曜日の朝学習の時間に、東京ベースィッドリルを使用し、計算問題に取り組んでいる。診断シートを2年生以上の学年で学期ごとに実施し、学力の定着度を把握し、算数の授業改善に生かしている。校内事情により、習熟度別の算数指導は実施できていない。	3	3	・学力向上のため、先生方はとても努力していると思う。 ・学力向上に向け児童が前向きに学べる環境が整うといよい。 ・オンライン授業が実施されており、従来の授業方法で不足してしまう勉強量を補うことができていた。 ・学習者用端末の利用を生かして、学年ごとの課題や学校としての課題に先生方が熱心に取り組み、学力向上に繋がっていることが良く分かった。 ・児童の学習意欲の継続、学習者用端末への取組から、困難な状態にもかかわらず順次進んでいる報告を聞いており、今後も引き続き実施してほしい。 ・チャレンジ教室が再開できるとよい。 ・できない児童へのフォローだけでなく、できる児童へのフォローもできるとよい。 ・学習補助員が学級全体の補助というより、特定児童の補助になってしまいがちなので、ボランティアに入ってもらうなど、学級全体をフォローできる人が必要。 ・今年度、算数の習熟度別授業が実施されていなかったが、学力向上においては理解度に応じた授業方法の再開ができたらい。	・ホワイトボードを活用し、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。 ・「背・手・目」「はい、立つ、です」などの授業規律については、不十分な学級があったので、次年度は全学級での徹底を図る。 ・毎週金曜日の朝学習の時間に、帯で東京ベースィッドリルに取り組むことで、学習の方法が身に付き、基礎学力の向上に繋がった。 ・長期欠席者に対するオンライン授業や様々な学習アプリの導入など、学習者用端末を活用することができた。必要に応じて家庭への持ち帰りも行っている。 ・習熟度別算数指導を実施することができなかったため、理解が不十分な児童や個別に支援が必要な児童に対して、必要な助言や支援が十分にできなかった。
健全育成(いじめ防止)	①ふれあいアンケートの実施 ②いじめにかかわる道徳授業の実施 ③いじめ防止校内委員会の充実 ④生活のきまりの活用 ⑤あいさつ運動の実施 ⑥熱帯の推進 ⑦サポート会議の活用 ⑧委員会・クラブ・たてわり班の充実	3	3	ふれあい月間のアンケートの結果から課題を把握し、必要に応じていじめ防止校内委員会を開き、学校全体でいじめ防止に取り組んできた。細かい事案にも早期対応、解決が図られている。 代表委員会を中心にあいさつ運動を実施し、朝だけでなく、様々な場面であいさつをするように指導している。 委員会・クラブ・たてわり班活動は、感染防止対策をした上で、回数や活動内容を減らすことなく実施することができている。	3	3	・今後も児童一人一人に向き合い健全な学校生活が送れることを望んでいる。 ・日頃の学校生活での先生と児童の関係を見て、先生への信頼があることが見て取れた。 ・道徳教育にも力を注いでおり、児童全てが授業参加できるよう努力していると感じた。 ・縦割り班活動による他学年交流により、高学年が低学年のお世話をすることであいさつや思いやり等の大切さ、社会性を学ぶことができている。 ・先生の指導により、児童自身の力でいじめを無くしていこうという考え方が身に付いてきていると感じた。 ・SNSのルールやデジタルタトゥーについてなどの話を、学校全体でもう一度話をしたほうがよい。LINEなどのトラブルからいじめなどに発展しかねないと感じた。 ・学校を訪問すると、必ず児童からあいさつが返ってくるので、あいさつの指導について徹底されていると感じた。 ・立ち番や所用で学校に行った時など、あいさつをしてくれない児童が増えたと感じた。	・生活のきまり「十三小の約束」や使用する学用品の一覧を年度初めや保護者の会の際に、学級指導したり保護者に伝えたりすることで、意識付けを図り、全校共通の取組として定着することができた。 ・学期ごとにふれあいアンケートを行い、早期での課題の把握、解決を図ることができた。 ・普段の指導に加え、小・中連携の日や学校公開日でのいじめに関わる道徳授業の実施により、他者への思いやりや生命尊重などの意識を高めることができた。 ・年2回のあいさつ運動を通して、学校生活の多くの場面であいさつができる児童の育成を図った。学校内では自分から率先してあいさつをする児童が増えた。
特別支援教育	①特別支援教室の効果的運営 ②特別支援巡回指導の活用 ③個別指導計画の作成と活用 ④特別支援校内委員会の効果的な運営 ⑤こぼれ支援シートの活用 ⑥児童一人一人の正確な見取り ⑦教室前面の掲示物の配慮 ⑧ホワイトボードの活用	3	3	特別支援教室の指導を効果的に進めることができるように、学級担任、通級学級の教員、特別支援専門員、特別支援コーディネーターがこまめに情報を共有し、連携を図ることができている。 巡回指導教員の授業観察の際に、通級児童のみだけでなく、気になる児童も多く見てもらい、必要に応じて個別指導計画を作成し、学校全体で情報を共有できるようにした。一人一人への組織的な対応を今後継続する。	3	3	・学校だけに委ねるのではなく、保護者も含めた地域全体で、障害やLGBTなどの現代を取り巻く課題に対し、学ぶ機会を設け理解度を深めることで、児童の特性を把握し、個性を伸ばす教育が実現できたらと思う。 ・個別指導計画が生かされ、児童の学びの喜びやできたことへの達成感につながるとよい。 ・学校経営協議会で報告などから、児童一人一人の課題に真摯に向き合っていると感じた。 ・通級に通っていない中にも支援が必要な児童が多いので、学校全体で情報を共有しているのはありがたい。	・学級担任、通級学級の教員、特別支援専門員、特別支援コーディネーターがこまめに情報を共有し、連携を図ることで、一人一人の児童に対するきめ細かい指導を行うことができた。 ・定期的な巡回指導により掲示物や個別支援の手立て等、授業改善に役立てることができた。 ・全学級で前黒板左右の掲示板上に貼る掲示物を制限することで、児童が学習に集中することができた。 ・保護者の同意のもとに個別指導計画を作成し、目標に沿った指導を学級や特別支援教室で進めることができた。 ・毎月の校内委員会では、関係職員で対象児童への指導の方向性を共通理解し、指導に当たることができた。
体力向上	①休み時間の校庭での活動計画 ②なわとび技術の向上 ③マラソンへの取組強化 ④体力テストの結果を基にした体育の指導の工夫 ①感染症対策の理解と実践 ②「早起き、早寝、朝ご飯」の啓発活動 ③基本的な生活習慣の確立 ④栄養士と学級担任による食育の授業	3	3	休み時間に校庭に出ることを呼びかけるだけでなく、教員も積極的に児童と遊んだり、計画的に学級レクを実施した。しかし、感染防止対策として、校庭を学年ごとに場所を区分けしたことで、校庭に出て遊ぶ児童はそれほど多くない。今後改善を続ける。 感染防止を留意しながら、運動会ではコロナ禍以前と同じように、徒競走、団体競技、団体表現、代表リレーを実施することができた。 保健だよりや栄養士の食育授業、出前授業を通して、基本的な生活習慣や食の大切さを指導し、効果を上げつつある。	3	3	・運動会で多くの競技を行うことができ、児童の一生懸命な姿を間近で見ることができてよかった。 ・高学年にもなると夜遅くまで起きている児童が増えていくため、体に変化する時期に自分を大切に、早寝早起きを心がける生活を送ってほしい。 ・ボール投げが苦手な児童が多いようなので、野球経験者にボールの投げ方を教えてもらう機会があるとよい。 ・生活リズムや睡眠時間の大切さなど、今後も保健だよりで周知してほしい。 ・新型コロナウイルス感染症の防止に配慮し、その中でできるものに取組み、一定の成果が現れていると感じた。 ・普段家であまり外遊びをしないので、なわとびやマラソン月間があるのは有難い。	・校庭を学年ごとに区分けて使用したが、教員が積極的に児童と遊んだり、計画的に学級レクを実施したりしたことで、少しずつ校庭で遊ぶ児童が増えてきた。 ・感染症対策を講じた上でなわとび月間やマラソン月間を実施し、学級・学年ごとに取組むことで、体力の向上を図った。 ・保健だよりや栄養士の食育授業、出前授業を通して、「早寝・早起き・朝ごはん」の定着や基本的な生活習慣の確立、食の大切さの理解図った。
ライフスキル	①C4thの積極的な活用 ②繁忙期を避けた月2回の定時退勤日の設定 ③年次有給休暇の15日取得、及び20日取得 ④管理職の積極的な休暇取得 ⑤副校長補佐の計画的・積極的な活用 ⑥スクール・サポート・スタッフの計画的・積極的な活用	3	2	C4thを積極的に活用したことで、情報を共有しやすくなり、連絡会の時間を短縮したりすることができた。 定時退勤日の設定、職員会議の内容の精選・削減により教職員が積極的に年次有給休暇を取ることができた。 スクール・サポート・スタッフの活用については、校内で見直しを行い、より校内の実情に合わせた活用が図れている。	3	3	・教職員の健全なライフワークが保たれるよう改善できることから始めていけたらと思う。 ・保護者に対して些細なことで連絡をくれ、相談しやすい環境づくりになっている。 ・教員と保護者、地域で協力し合い、職場環境の改革や業務効率を上げるだけに留まらず、働きたい・通いたいと思える学校をつくっていくことで、より良い教育につながればと思う。 ・時間外勤務短縮の取り組みについて、学校経営協議会で説明があったが、その成果と実践する上での課題などについていずれ説明を聞きたい。	・C4thの積極的な活用により、連絡会の時間短縮や教職員の作業時間の短縮につながった。 ・「自己申告書」にライフ・ワーク・バランスの取組に関する記述をすることで、教職員の働き方改革や業務の改善に対する意識を高め、残業時間の削減につながった。 ・定時退勤日の設定、会議の精選・削減により、多くの教職員が年次有給休暇の15日取得(クリアフィアーン)を達成できた。 ・スクール・サポート・スタッフの活用方法を見直したことで、校内全体の作業時間の短縮につながった。